第2章　地区の現況特性

1　人口・世帯等の動向

（1）地区別人口・世帯の動向

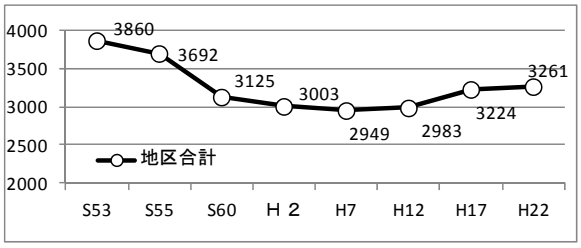
・調査地区の人口・世帯は平成７年以降増加傾向にあります。マンション建設が活発に行われている高横須賀町、横須賀町での増加が大きくなっています。

・一方、平成７年までは、世帯数がほぼ横ばいのなか、人口は減少傾向にあり、特に古くからの住宅が多い横須賀町、養父町を中心に世帯分離などが進み、高齢者のみの世帯が増える傾向にあると推察されます。

・詳細に地区別動向をみると、国道１５５号西側のゾーンでは人口が減少している地区が多くみられ、旧市街地内では空洞化も進行しています。

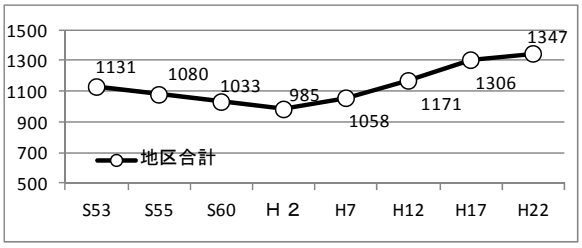
■調査地区の人口動向

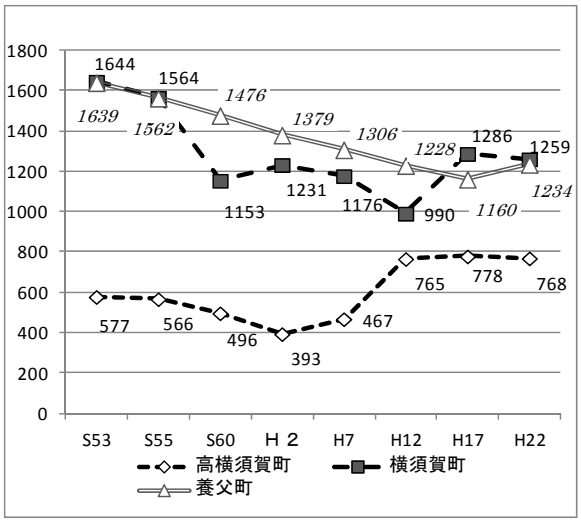
（単位：人）

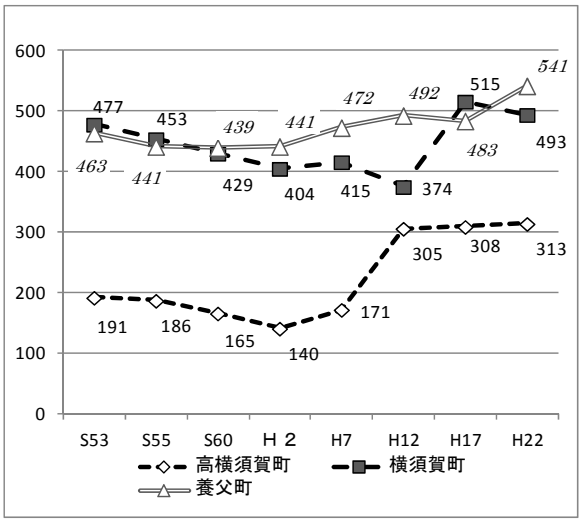


■調査地区の世帯数動向

（単位：世帯）







（資料：東海市の統計）

入口密度（H22年）

入口増加率（H12-22年）

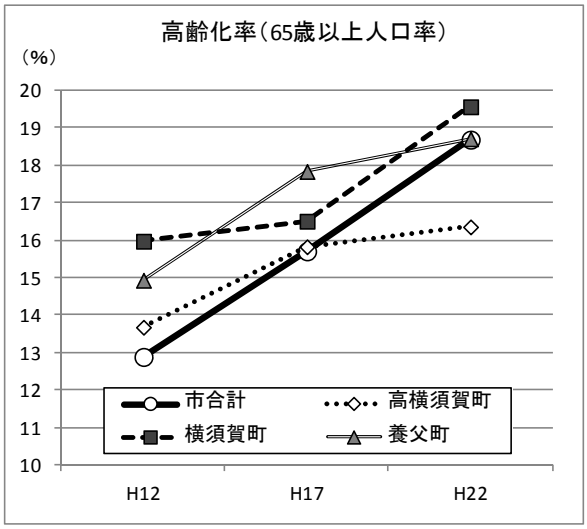
世帯増減率（H12-22年）

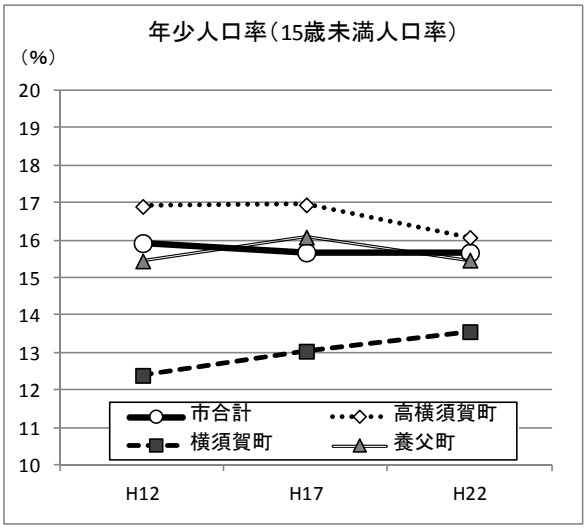
1世帯当たり人口（H22年）

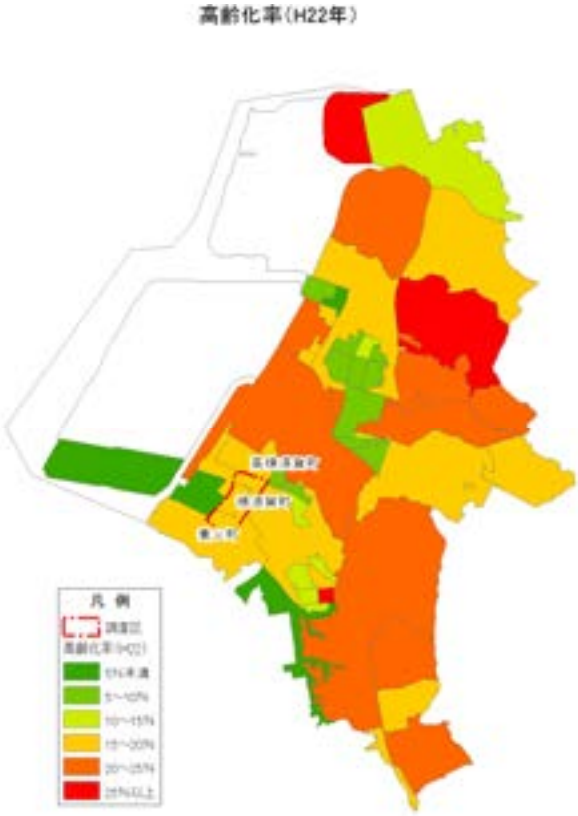
（２）高齢化率・年少人口率

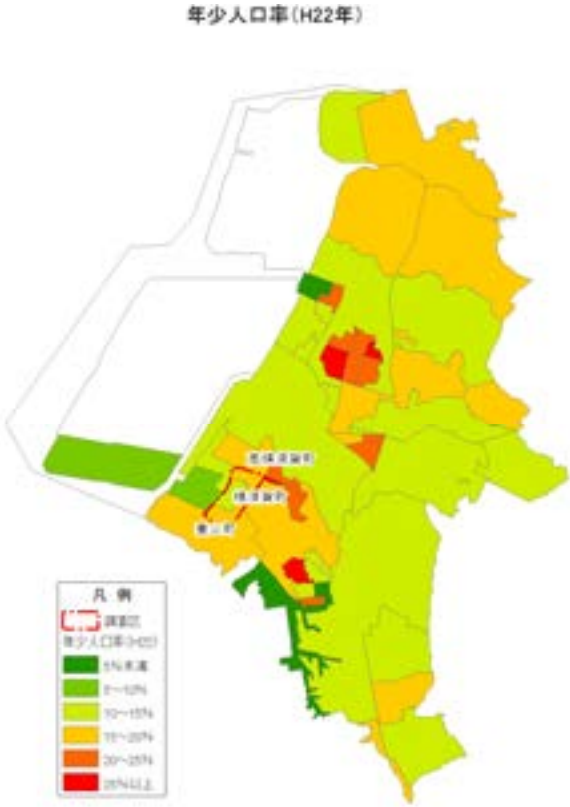
・調査地区を含む３町では、東海市全体と同様、いずれの町でも高齢化率が年々増加する傾向にあり、特に横須賀町、養父町では、高齢化率が２０％近くに達しています。

・一方、年少人口率は、高横須賀町及び養父町では、東海市全体と同様、ほぼ横ばいから微減の傾向にありますが、横須賀町では微増傾向にあります。









（資料：国勢調査小地域集計）

２　土地・建物利用

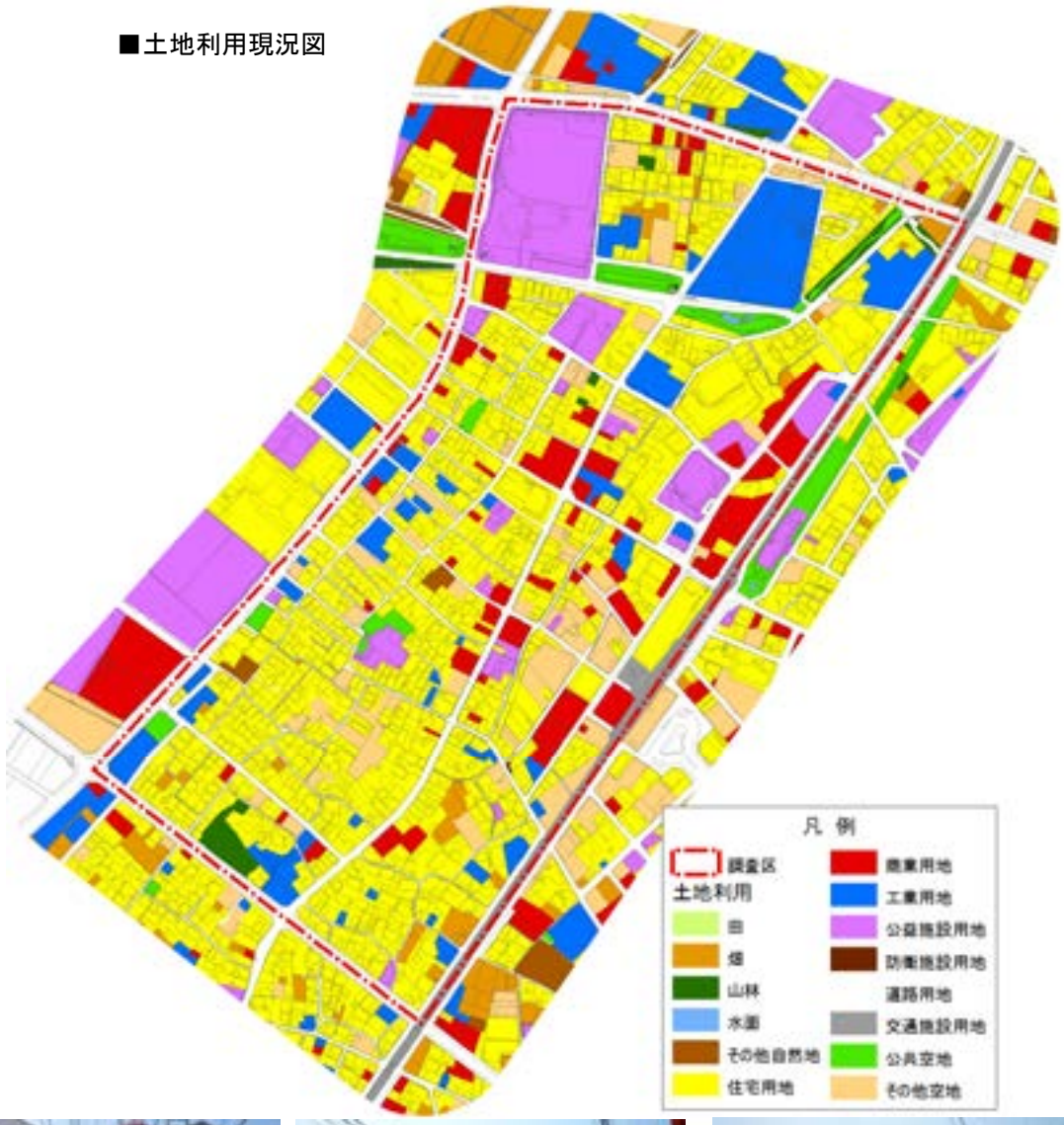
（１）土地利用状況

・駅周辺は商業系の用途地域が指定されているが、まとまった商業用地はみられない状況にあり、地区を南北に走る国道１５５号沿いに商業用地が点在しています。

・地区全体では住居系土地利用が主体であり、そのなかに工業用地や青空駐車場などの未利用地が点在しています。

・公園緑地（公共空地）などのまとまった緑は少ない状況にあります。

■土地利用現況図



駅周辺の商業地

155号沿道の商業地

市街地のなかに散在する未利用地

（２）建物用途現況

・戸建住宅が主体であるが、国道１５５号の東側では共同住宅の立地が多くみられます。
・国道１５５号沿いでは商業施設や店舗併用住宅が路線型に立地しています。
・地区北部にやや規模の大きい工場がみられるほかは、規模の小さな家内工業施設やサービス工業施設が多く立地しています。

■建物用途現況図

駅周辺の高層マンション

国道155号沿道の商店

（３）建物構造現況

・木造建築が大半であるが、国道１５５号東側や幹線道路沿道では建替えも進行し、非木造建物が増えています。

■建物構造別現況図

市街地内で新築も進む。

住宅の更新に合わせたセットバック

（４）建物階数

・大半の建物は２階建て以下となっています。
・近年、１１階～１４階建の高層マンションの立地もみられます。

■建物階数現況図

（５）建物建築年次

・昭和４５年（１９７０年）以前に建てられた比較的古い建物が多くみられます。
・駅周辺や幹線道路沿いでは、比較的新しい大型の建物も増えています。
・市街地内部でも住宅の更新は進行しており、新築住宅も目立つようになってきています。

■建物建築年次別現況図

３　道路・交通施設現況

（１）交通施設現況

・地区の中央を南北に国道１５５号（一部国道２４７号と重複区間）、地区の北端を東西に国道１５５号が通っています。

・地区東端を名鉄常滑線が南北に通っています。地区内には尾張横須賀駅があり、名鉄名古屋駅へは特急で約２０分、中部国際空港駅へは約１７分で結ばれています。一日当たりの乗降客数は、平成２３年度で約５千人と市内で３番目に利用者が多い駅となっています。

■交通施設現況図

市道横須賀加木屋線

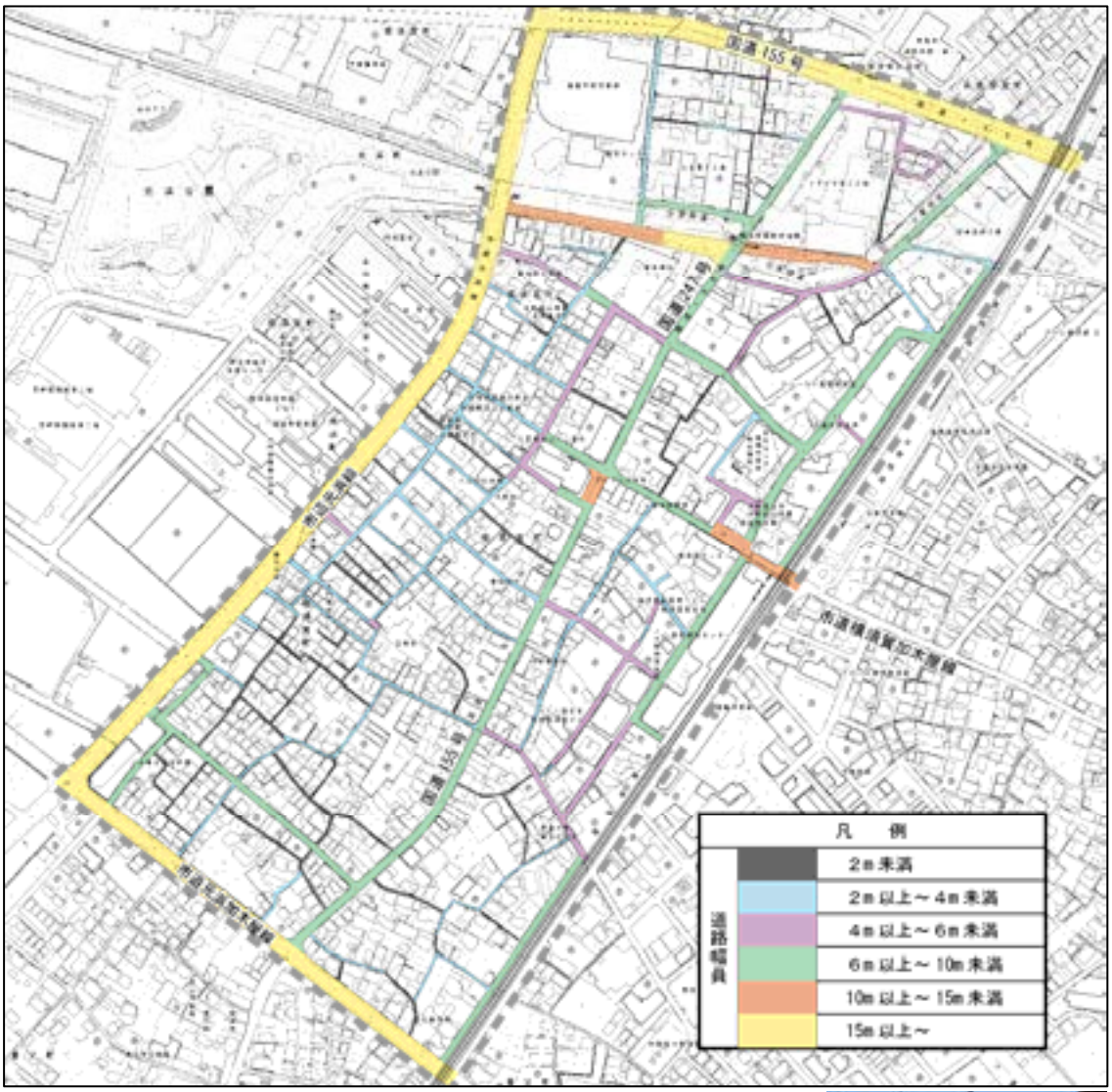
市道元浜線

（２）幅員別道路現況

・地区の外縁を通る国道１５５号、市道元浜線、市道元浜加木屋線は広幅員で、歩道や植栽も整備されています。

・地区内は江戸時代より形成された町割りが今も残り、幅員４ｍ未満の狭あい道路が多くみられます。

■幅員別道路現況図



町方内部の幅員4m程度の整然とした道路

市街地内の狭あいな道路

自動車の通行できない狭あい道路だが緑化がなされ、コミュニティ空間となっている。

4　公共公益施設現況

・市体育館、文化センターなどスポーツ・文化活動の拠点となる施設が地区の北側に集中しています。

・元浜公園や元浜スポーツ広場が調査地区に隣接しています。

■公共公益施設現況図

尾張横須賀駅

文化センター

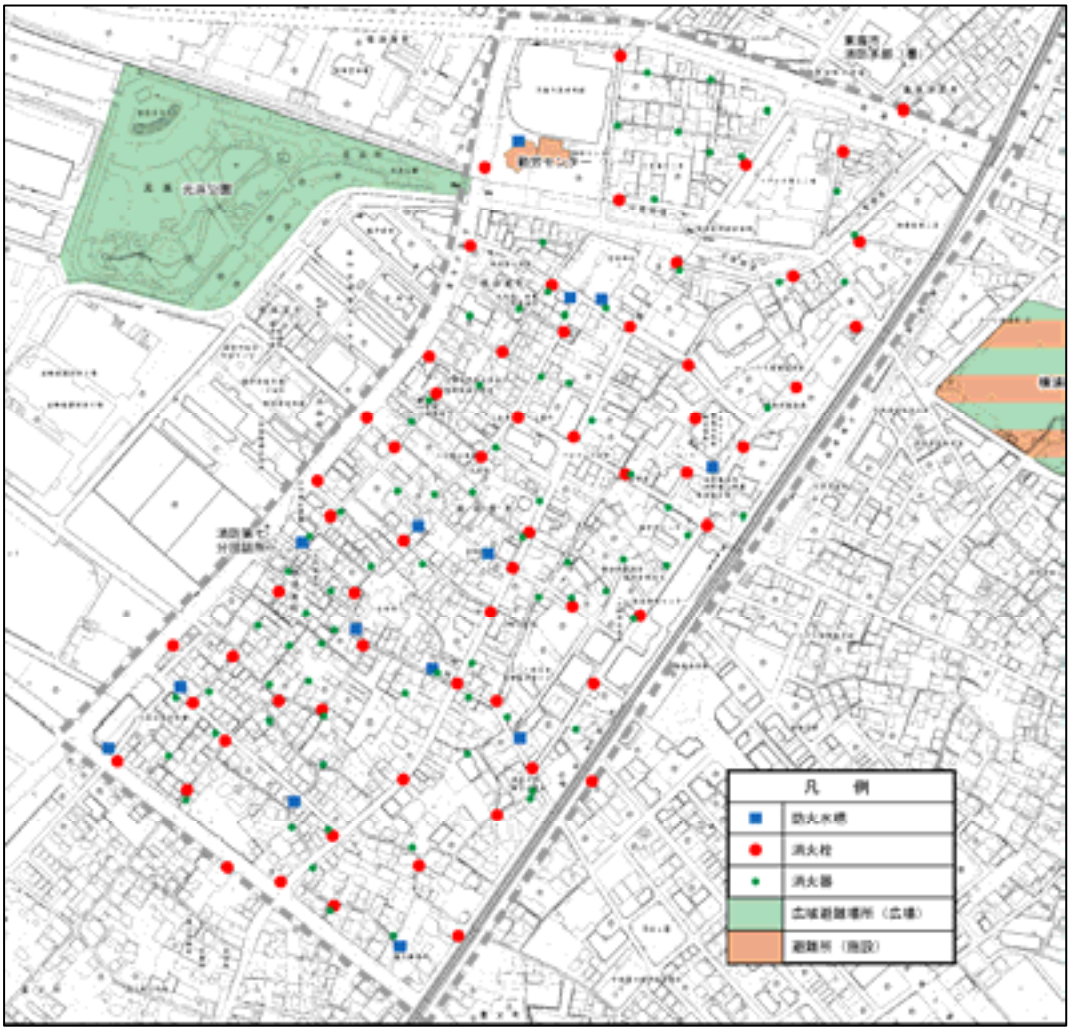
公家緑道

5　防災施設現況

・勤労センターが避難所に指定されているほか、広域避難場所の元浜公園、広域避難場所・避難所の横須賀小学校が隣接しています。

・地区内には防火水槽と消火栓のほか、消火器も密に設置されています。

■防災施設現況図



まちかどの消火栓

住宅地に据えられた消火器

防火水槽

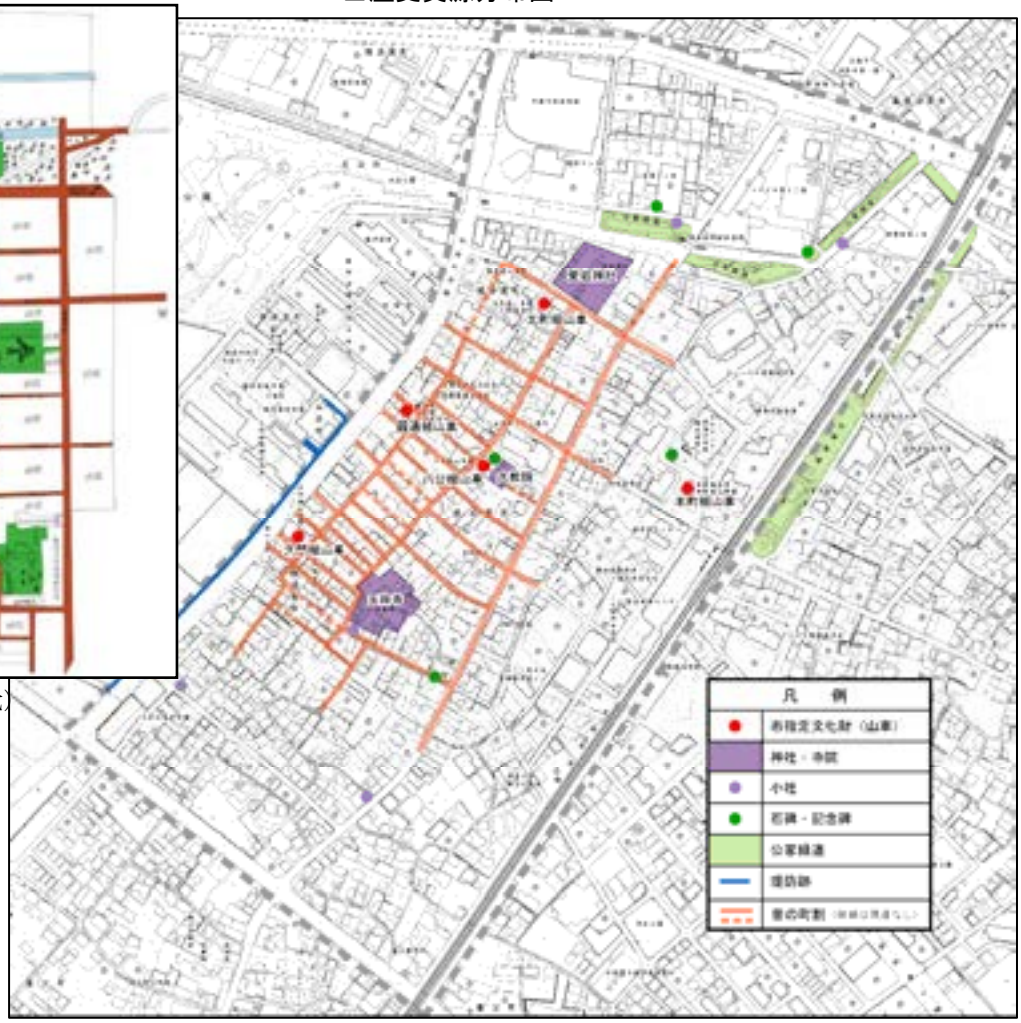
６　歴史・文化資源

（１）歴史資源

・５台の山車が市指定文化財となっており、祭組ごとに山車蔵が設けられています。
・横須賀まつりが行われる愛宕神社のほか、玉林寺、大教院や小さなお社が点在しています。
・かつての雰囲気を留めた古い家屋が狭あい道路沿いに残っています。また、愛宕神社から玉林寺にかけて整然と碁盤割にされた横須賀町方の町割が往時を偲ばせています。
・入江が埋め立てられ整備された公家緑道が、緑豊かな憩いの場となっています。
・市道元浜線には、かつての海岸に沿ってつくられたコンクリート製の堤防がそのままの姿で残されている。

■歴史資源分布図

横須賀町方絵図（江戸時代）



山車蔵

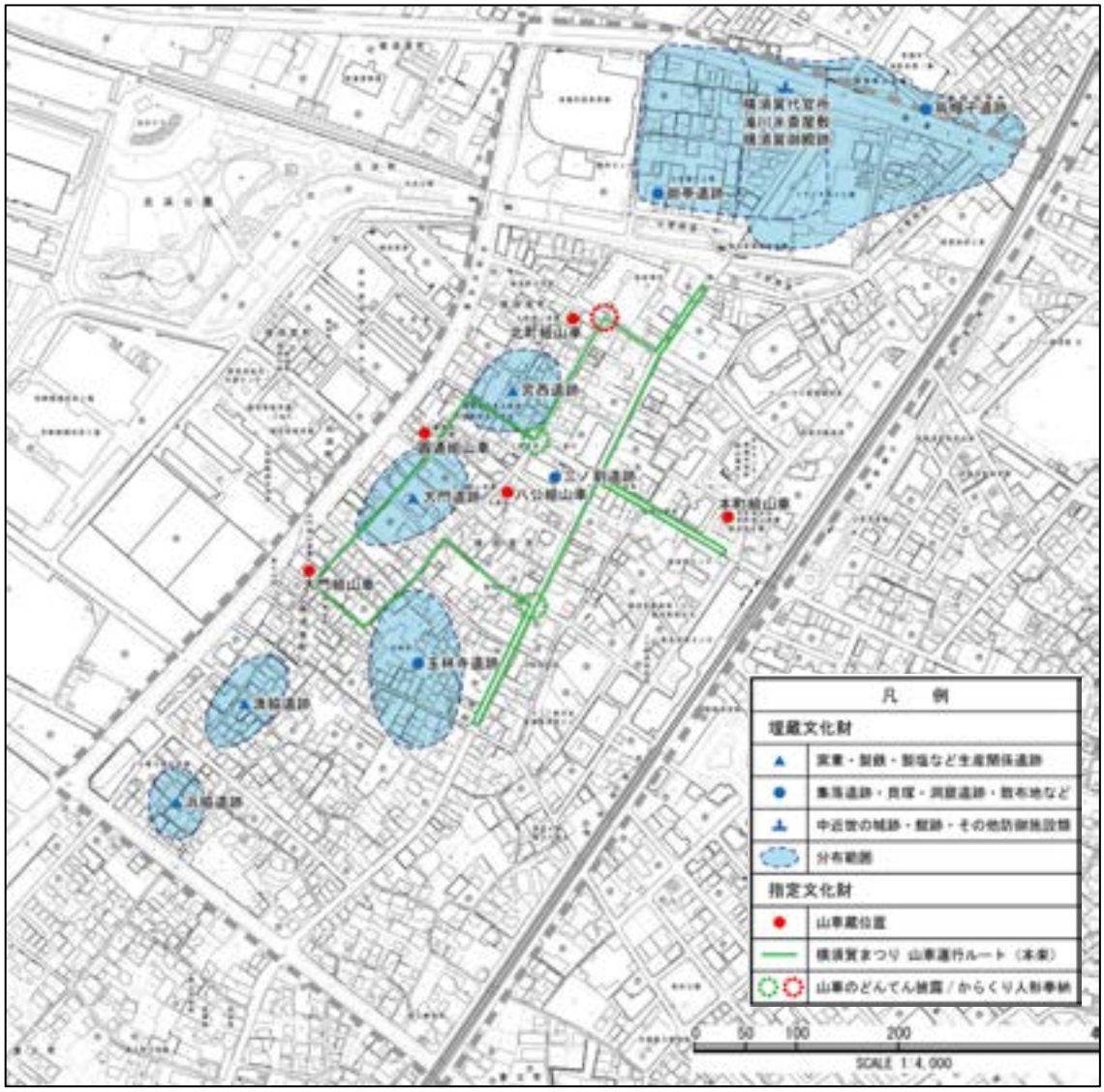
愛宕神社参道

玉林寺

（２）埋蔵文化財

・古墳時代からの御亭遺跡や、縄文時代からの烏帽子遺跡、弥生時代からの三ノ割遺跡など、古代より海岸に近いこの地で人が生活を営んでいたことがわかる。そのほかにも、奈良時代から平安時代にかけて人が生活を営んでいたことを示す遺跡が多数発見されています。

■文化財位置図



（３）横須賀まつり

・愛宕神社の秋まつりで、約３００年前の寛文から元禄年間にかけて、尾張二代藩主徳川光友公が横須賀御殿に訪れた際、旅情を慰めるため奉納された傘鉾まつりが始まりとされ、江戸時代末期（１８０１年以降）約２００年前に山車に替わったと言われています。
・土曜日に行われる「試楽」は、「町内曳き」と言い、各祭組の山車はその町内のみを隈なく曳き回された後、午後から順次市道元浜線に曳き出され勢揃いします。
・日曜日に行われる祭礼が「本楽」で、愛宕神社の神事の後、神社前に勢揃いしている祭神輿と各祭組の山車が順番に横須賀町内を曳き回されます。出発前に神社の前で各祭組の山車が「からくり人形」と「祭囃子の楽」を奉納、どんてんを披露します。そして定められたルートを順番に曳き回され、神社の鳥居を北に拝した一本南側の十字路で「大どんてん」を行い、再び愛宕神社へと戻ります。
・この「どんてん場」で行われる「大どんてん」で大きな山車が担ぎ手によって回転させられると、観客の大きな拍手と歓声に包まれ、まつりは最高潮に達します。神社前に再び勢揃いした山車には沢山の提灯が飾り付けられ、その提灯に燈火されると夜まつりの始まりとなります。
・夜間、再び神社前から本町通（国道２４７号）を南進し、この通りの十字路で夜の「どんてん」を行います。「どんてん」を終えた山車は十字路から西の小路へと入り、再び氏子に曳かれて山車蔵へと戻り、夜遅くにまつりは終了となります。
・まつりの担い手は４組で約４００人、組織は若衆、中老、舵方、楽人、行司から構成され、若衆は組だけでは人数が足りず、高横須賀町や養父町からも加勢が加わります。まつり保存会は、毎年４月の総会から活動が始まり、９月に入ると日曜日を除くほぼ毎日練習となります。

参道のにぎわいと山車

どんてん

からくり人形の奉納

7　趣のある建物とまち並み

・現存する古い建物は、知多地方の古い港町で良く見かける、杉板の押縁下見板張り（簓子下見張り）の外壁が特徴的で、古い建物は平屋（小屋裏利用）の家やツシ二階建て（小屋裏居室利用）が見受けられる。
・屋根は瓦葺切妻や入母屋が主で、庇の特徴としてセガイ（船櫂）造りの軒先を多く見かける。
・江戸時代は、旅籠や遊郭などを除き二階建ての町家は許可されていないことから、二階の高い建物は明治後半以降から戦前までの建物だと推測できる。二階建て建物の現存する二階木製窓の木手摺の装飾は各建物ごとに違い特徴的な姿を今に残している。
・古くなった建物を改築したものも多く、外壁を竿縁下見板に似せた黒い鋼板張りとして景観に配慮したケースが多くある。モルタルを塗ったもの、新建材のサイディングを貼ったものなどもなかには見受けられた。
・窓まわりには、木製の建具や格子や雨戸戸袋の建物が多く現存し、現在も店舗や住宅として利用されているケースや、建物を保存しながら玄関周りをアルミサッシとしたり一部改築して利用されている住宅や店舗も見受けられる。
・また、建物に付属する門や塀においても、新旧の板塀などがある一方で、ブロック塀やアルミフェンスなどの無機質なもの設けられている。そのような新旧の町家の建物群のなか、まちかどに大正時代を偲ばせる洋風建物もある。

押縁下見板張りの外壁

ツシ二階建て

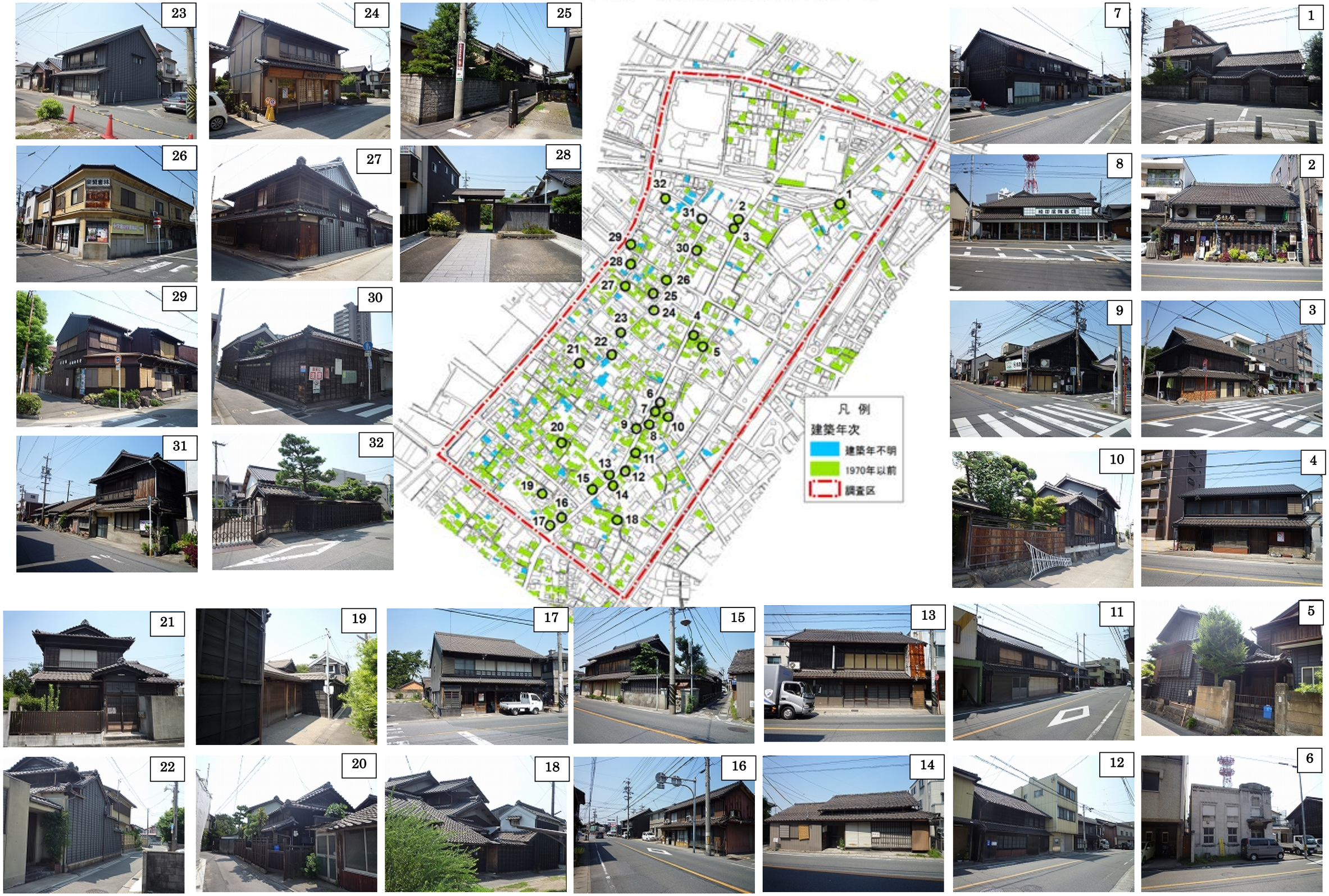
セガイ造りの軒下

二階建て建物と窓手摺

保存して店舗として利用

一階店舗部分を改築

レトロな書店

洋風小屋

1970年以前の木造建物（建築年次不明を含む）